「っ！　ほんと、やめてくださいって！　こんなの、やっぱり駄目ですって！」

「ちょっと、キャァ！」

　あの後、一度目のセックスを終えた中川と早乙女。
　一度出したことで冷静さを取り戻した中川は、早乙女の身体を押しのけようとしていく。
　流石にこれ以上二度も三度も行為に臨む気はないようで、必死に逃げようと身体を動かしていた。
　そして、どうにか彼女のおまんこからチンポを引き抜いたと思いきや、早乙女は体重をかけて改めて深く挿入させていく。

「ちょっと！　なによ！？　一回出しておいて逃げるつもり？！　ふざけんじゃないわよ！」

「う、ぅわ！？　やめてくださいって！」

　挿入させたまま、早乙女は逃げようとした中川に怒りをぶつけていく。
　騎乗位でチンポを入れたまま、中川の頭あたりを握り拳で何度も何度も叩いていく。

「射精したらそれで終わりってどういうこと！？　こら！　人がせっかく中出しさせてあげてるのにそれってないんじゃないの！？」

「お、落ち着いてくださいって！」

「私は落ち着いてるわよ！　ほら、もう一回立たせてなさいよ！　じゃないと責任取らせるわよ？！」

　早乙女は無茶なことを言っていく。
　女に怒られて叩かれながら勃起するなんてことは中川には出来そうにもなかったからだ。
　これ以上怒らせないように、股間に意識を集中させていってみるけれど、どうにも上手くはいかない。

「……ごめん、ちょっともうこれ以上は立たないみたいで」

「は、はぁ！？　なによそれ、私じゃ興奮しないっていうの！？　失礼じゃない！？」

　申し訳なさそうに告げる中川に更に食って掛かる早乙女だが、勃起しないものはしない。
　早乙女が美人であり、スタイル良くても男には行けるときと行けないときは確かにあり、この状況は後者だった。
　おまんこにチンポは入っているけれど、かなり萎えていてさっきまでの硬さはなく、これ以上のセックスは望めないのは明白だった。
　しかし、それでは女のプライドが許さないのだった。

「勃起させなさいよ！　ほら！」

“ぎゅぅ！”

「グェー！？」

　勃起しろと脅しながら、中川の首を絞めていく。
　いくらなんでもそんなことで勃起はするはずもなく、中川も苦しさに舌を伸ばしてジタバタするだけだった。
　むしろ、首を絞められてチンポはより一層萎えていく。
　必死に抵抗して何とか首絞めをやめさせた中川だが、息も絶え絶えだ。

「はぁはぁ、ですから、もう無理ですって！　流石に！」

「くっ、しぶといわね……」

　相変わらず騎乗位でチンポを入れたままではあるが、既にセックスする雰囲気ではなくなってしまっている。
　早乙女はそれに気付かないで、もう今は意地で二回戦目をやらせようとしていて、それしか考えていない状況だった。

「ほら！　おっぱい見てもダメ！？」

「無理ですよ〜……」

　女のプライドを守るためにか、水着をはだけてその大きめの胸を見せていくが、中川は困惑するばかり。
　勃起する気配もなく、挿入されているチンポはピクリともしていない。
　それに早乙女はまた顔を赤くして怒っていく。

「なんでもイイから勃起させなさいって！　出来るでしょそれくらい！」

「で、ですから、もうこれ以上は流石に無理ですって！」

　早乙女のプライドと中川の抵抗の声は、その後もしばらく続いていた。